

「貧富の格差」

2015年10月29日

「一億総中流」と言われた時代から、様々な経済的変動を経て、今や「貧富の格差」という言葉が定着した。米国では、1%の人が富を享受し、99%の人々が貧困に喘いでいると抗議の声をウォール街で上げた。米国軍は他国との戦争だけでなく、貧しい者たちの暴動に備えて待機しているとも聞く。日本でも、湯浅誠氏の『反貧困』が出版され、貧しくさせられている現実が注目された。湯浅氏は「最大の敵は『無関心』」です。どうか貧困問題に関心を寄せてもらいたい。それが、今日からでもできる『反貧困』の活動の第一歩です」と書いている。しかし、貧困がニュースの焦点になることはない。

現在、6人の子どもの内、1人は家庭の貧しさによって、十分な食事が取れていない。当然、教育を受ける道も狭まっている。その子どもたちの心の中は、どんなであろうかと想像する。ブラジルに行った時、こんな話を聞いた。黒人奴隷たちはムチ打たれて労働に追われる。彼らは体が大きく体力もあるが、ムチ打たれ続けることによって、自分はダメな人間だと心底思い込まされ、心の中まで、萎えてしまうというのである。十分な食事を取れない子どもたちは友だち付き合いにおいても、対等にはなれないだろう。彼らは心の中で、自分はダメで、つまらない人間だと思いついてしまうのではないか。自己肯定する心も居場所も見つけることはできない。彼らはどんな成長をするだろうか。日本にとって、大切な人材を損なう大きなマイナスだと思う。

一方、生活保護基準、それ以下で暮らす「下流老人」が話題になっている。年金は下がり、医療費は上がる。生活に困窮をきたし、食事は偏る、暑い日でもクーラーはつけられない、体を温める風呂にも時々しか入れない。一生懸命に働いてきたのに、晩年に、このような生活に追い込まれることは、何と悲しいことか。孤独死もしばしば報道される。

経済学者の服部茂幸氏が『アベノミクスの終焉』を上梓し、貧富の格差について次のように書いている。「格差が大きな国では、精神病や麻薬が広がる。国民の間で肥満が広がり、不健康になり、平均寿命は縮まる。人々間の協力関係がなくなり、経済学の言葉で言う「社会的資本」が破壊される。教育レベルは低下し、十代の少女の妊娠が増加する。犯罪も増加する。こうして社会を荒廃させるのである。」貧富の格差は、個々人においては体を病み、生きる意欲を失わせるから心を荒廃させる。社会的には人との関わりが希薄になり、不安定さが犯罪を増大させていく。容易に想像できる。

貧困は「自己責任」と言って、切り捨てる風潮もあるが、どんなに懸命に働いても、廻ってきた状況によって誰もが「下流老人」になり得る。管理された社会では、一人の努力は微々たるものになっている。貧富の格差は政治の問題である。「トリクルダウン」、富裕層が更に豊かになれば、しずくが下に垂れて、恩恵に与ると言った。しかし、現実はそのようになっていない。貧しい者はますます貧しくなっている。

安倍政権は戦争をする国になろうと「安保関連法」を強行採決した。戦争をすれば、莫大な費用がかかる。国庫は1千兆円を超す借財を抱えている。どこから、戦費を捻出するのでしょうか。「愛国心を」と言うが、誰もが国を愛したいだろう。生きることを喜べる時、自ずと国への愛着を持つようになる。どのような国を作るのかという根本的な議論をすべきではないか。戦争に向かう国になれば、貧富の格差は増大する。子どもたちがお腹一杯食べ、望む教育を受けられる。そして、老後は安心して、余生を送れる。そのような国家ビジョンを打ち立て、その政策を実行してもらいたい。